第三章　隠された原理——ウパニシャッド

ウパニシャッドでは祭式をめぐるテーマは背景に退き、広義の「哲学的議論」が前面に出る。議論の中心は現象界の背後にある原理の探求である。このような探求の結果、世界の最高原理はブラフマン（「梵」、原義については第一章解説参照）の名に集約されていき、「ブラフマンは……である」という形式（アーデーシャ「措定・断定・断言命題」）において諸説が提出される。個々の存在物の次元、ことに個人の面では諸々の原理探求の試みがアートマン（「自己」）の名の下に集約されていく。ブラーフマナ、ウパニシャッドを通じての知性の代表者であるヤージュニャヴァルキャはアートマンを徹底した形で説き、ブラフマンとアートマンとを同置するに至る（本章2参照）。このような営為の中で、死後の問題が主要なテーマとなっていき、輪廻（サンサーラ）や業（カルマン）という考えが説かれ、あるいは新たに報告されて検討されるようになっていた。

「ウパニシャッド」の原義については諸説があるが、この語形を直接分析して得られる意味こそが上記の基本的性格によく合致し、かつ、ブラーフマナ文献の思考原理の延長上に良く収まると考えられる。すなわち、「ウパ」は地理的、心理的により低い位置からあるもののもとへ、あるもののところまで近寄る、至る動きを示す動詞前綴であり、「ニ」は同じく「中に、下に、もとに、自分のところに」を意味し、「サッド」は「据わる、座る」を意味する動詞語根そのままの語根名詞である。全体として「ものの背後・根底に位置する・存するもの・こと」（ヒポスタシス）を意味すると考えられる。

ウパニシャッドに見るような「哲学」そのものを対象とした議論が前面に出て来た背景

には社会の変化も与っていたであろう。アーリヤ人は、この間、さらに東漸を進め、定住生活を達成し、ガンジス河上・中流域を中心に都市ないし小都市国家が成立しつつあったことが窺われる。それまでの婆羅門（ブラーフマナ）階級の護持する文化は小規模な村落共同体およびその連合の存在を前提としていた。婆羅門教文化のこの性格は時代が下がって成立するダルマ・スートラ（「法経」）、さらに後代のダルマ・シャーストラ（「法典」）などの「理念世界」においても基本的にそのまま当てはまる。ウパニシャッドの成立前後とそれに続く時代は、村落共同体を越えた思想潮流が各方面に出現した特別な時代であり、仏教・ジャイナ教の両開祖や、その他、既成の枠組みを越えた思想家や学匠の活動が婆羅門教文化の内外で可能であり、求められた時代であった。都市を中心とした諸国家の成立過程で、国の指導者の側でも知識人たる有力な思弁家を必要としたらしい。古いウパシニャッド文献に見られる神学的討論（本章1）も、こうした時代背景のもとに脚色されたものかもしれない。無論、我々はここでも祭官の視野から説かれた資料しかもっていない。

ウパニシャッドは後のインド思想展開の直接の基盤とも言うことができ、仏教興起の問題を考える上でも、思想内容、社会状況、言語、文学スタイルなど、多層にわたって本質的重要性をもつ。よく紹介されているとはいえ、インド文献成立発展史全体の中で真の位置に置いて検討することは、今後の、しかもおそらくは現在の課題であろう。

ここでは最古層のウパニシャッド（『ブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッド』、『チャーンドーギャ・ウパニシャッド』、『ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ』）の中、前二

者から三箇所を選んだ。他に、天界に至る道、輪廻の道筋、質料的世界構成説、生成還滅説、発展した神概念などについて、多様にして重要な議論が見られる。

底本は、

V.P. Limaye and R.D. Vadekar eds., *Gandhi Memorial Edition. Eighteen Principal Upaniṣads.* Vol.I. Poona : Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, 1958.

を中心に、各種の刊本を照合して用いた。

―ことばによる決闘

「ことばによる戦い」は太古から部族間の戦さや調停の一制度であったろう。ブラフモーディャ（「ブラフマンをめぐる討論」または「婆羅門・学者の討論」）とよばれる神学的「謎かけ」問答は、形式化されてシュラウタ祭式の中にも組み込まれており、また、祭官職の重要な地位を争う実際の勝負の形をとって、ブラーフマナ文献に語られている。ここに抄訳する『ブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッド』第三巻の例では、ジャナカ王（当時すでに伝説化）の下で、ヤージュニャヴァルキャ（『ヤジュルヴェーダ』の新学派を開いた開祖とされる。その名も「祭式の効力・霊験」を意味する語からなる）が他の祭官（学匠）たちを打ち負かす、という舞台設定になっている。『シャタパタ・ブラーフマナ』にある祭官職争いの話題を枠組みに用い、祭式の意義付けから宇宙の根本原理と自己の本質の探求を中心としたウパニシャッド的思弁にわたる、諸々の議論を集成している。脚色に関わる工夫や拡大の跡も窺われる。女性の学者（現実に祭官でありえたとは考え難い）が登場するのはこの箇所だけであろう。対決は敗者の沈黙によって終わるが、能力の限界を越えて問い、無理な挑戦をすると頭頂が破裂する危険がある。仏典の「頭頂が七つに弾け飛ぶ」という表現がこれに対応する。普通は警告・脅しのことばとして現われ、現実にその悲劇が語られるのは、シャーカリャの場合だけであろう（当箇所と基になったブラーフマナの箇所と）。インド思想展開の重要な場であった「論争」の、古い姿が窺われる部分を中心に抄訳する。提示される議論の背景には、ヴェーダの学習があり、祭式や讃歌の解釈をめぐる講義・演習があったはずで、讃歌解釈の「科目」中にプルシャ讃歌（前出）が大きな役割を果たしていたように思われるふしがある。

本来こちら
∵ brahmavādin-

ヴィデーハの首領ジャナカ[1]は多くの報酬を伴った祭式によって、自らの祭式を行なった。そこにはクル・パンチャーラの婆羅門たちが参集するところとなった。そのヴィデーハの首領ジャナカには識りたい気持ちがおこった、「これらの婆羅門たちの中で、誰がいったい最も学識があるのか」と。彼は牛を千頭、囲いに入れた。各々の〔牛の〕両の角には十パーダずつ〔黄金が〕結び付けられた。(三・一・一)

彼らに言った、「婆羅門の方々、君たちの中で最も優れた婆羅門である者が、これらの牛たちを(自分のものとして)追い立てなさい。」彼ら婆羅門たちは敢えてする勇気をもたなかった。すると、ヤージュニャヴァルキャが自分の弟子に言った、「これら〔の牛たち〕を、君、追い立てろ、サーマシュラヴァス!」。それら〔牛たち〕を(サーマシュラヴァスは)導き出した。彼ら婆羅門たちは怒った、「どうして彼が自分を我々の中で最も優れた婆羅門と言えるのか」と。さて、ヴィデーハの首領ジャナカのホートリにはアシュヴァラがなっていた。彼がこの者に質問した、「君が、ヤージュニャヴァルキャよ、我々の中で最も優れた婆羅門なんだね。」彼は言った、「我々は最も優れた婆羅門には敬意を表する。(だが)我々はただ牛が欲しいだけなのだ。」すると続けて、ホートリのアシュヴァラが彼に問いを開始した。(二)

「ヤージュニャヴァルキャよ」と彼は言った、「この一切は死に到達されている、一切は死に足を掛けられているのだが、何によって祭主は死の到達を越えて解放されるのか。」「ホートリ祭官によって。〔祭〕火によって。ことばによって。ことばは祭式のホートリなのだ。その際、このことばなるもの、それはこの火だ。それはホートリだ。それは解放だ。それは〔死を〕越える解放だ。」(三)

→ WINDISCH
Bsg 69f.

〔以下、アドヴァリュ祭官―視覚―太陽によって昼と夜とを越える、ウドガートリ祭官―風―呼吸によって前半月と後半月とを越える、ブラフマン祭官―思考―月を足掛かりとして天界に歩み入る、等々、祭式解釈に沿った質疑応答が続く。アシュヴァラは結局問うのをやめる。〕

〔次にアールタバーガが質問する。呼吸（嗅覚）、ことば、舌、視覚、聴覚、思考力、手、皮膚、の八種の生体諸機能をめぐる問答に続き、死がテーマとなる。〕

「ヤージュニャヴァルキャよ」と（アールタバーガは）言った、「この（地上の）人間が死に、彼のことばが火に入る、風に呼吸が、視覚が太陽に、思考が月に、諸方位に聴覚が、大地に骨格が、空間に自己（アートマン）が、植物たちに体毛たちが、木々に頭髪たちが〔入る〕時、〔そして〕水たちの中に血液と精液とが置き入れられる時、この人間はその時どうなるのか。」「（私の）手を、君、取りなさい、アールタバーガ。我々二人だけがこれについて知ることになろう。これは我々二人にとって、人と一緒では駄目だ。」二人は退出して、談じ合った。[2] 二人が語った時、その時二人はまさしく行為（カルマン、業）を語ったのだ。また、二人が讃えた時、その時二人はまさしく行為（カルマン）を讃えたのだ、「善き行為により、人は善いものとなる、悪い〔行為〕によって悪いものに」と。それからジャーラットカーラヴァ・アールタバーガ（ジャラットカールの末裔、リタバーガの息子）は〔問うのを〕やめた。（三・二・一三）

〔以下三名が問答をしかけた後、第六節でガールギー・ヴァーチャクナヴィー（ガルガの末裔、ヴァチャクヌの娘）という女性が登場。彼女は、この世界が水を基盤として経緯（たてよこ）に織られているが、その水は何の上に（空間的には下に）織られているか、と問いを発し、順次問うていく。ヤージュニャヴァルキ

二通説

太陽—月の
遠近
→ cf. WINDISCH
B'sg 67

ャは、風—空間—ガンダルヴァの世界—太陽（が位置している）世界—月（が位置している）世界—星座（のある）世界—神々の（いる）世界—インドラ神の世界—プラジャーパティ神（「子孫の主」）の世界—ブラフマンの世界、と順次上に向かって、より基礎となる世界の構成・階層を答える。それに続けて〕

「それではブラフマンの世界は何の基礎に立って経緯に織られているのか」と〔ガールギーが言った〕。彼は言った、「ガールギーよ、問いすぎてはならない。君の頭頂が飛び散ることがないように。君はそれを越えて問うてはならない神格のことを限界を越えて問うているのだ。ガールギーよ、問いすぎてはならない。」するとガールギー・ヴァーチャクナヴィーは〔問うのを〕やめた。（三・六・一）

〔次にウッダーラカ・アールニ（アルナの息子）が内部で制御している者（アンタルヤーミン）について問う。その中の一節〕

「そこでもし君が、ヤージュニャヴァルキャよ、〔その〕糸を、また、かの内部で制御している者をも知らずに、婆羅門に属する牛を追い立てて行くなら、君の頭頂は飛び散るだろう。」「知っているとも私は、ガウタマよ、その糸もその内部で制御している者も。」……（三・七・一）

〔再びガールギー・ヴァーチャクナヴィーが登場〕

次にヴァーチャクナヴィーが言った、「婆羅門の方々、さて、私がこの者に二つの問いを問いましょう。もし私に二つとも答えるであろうならば、君たちの中の誰一人、決してこの者から論争（ブラフモーディヤ）を勝ち取ることはないでしょう。」「問え、ガールギーよ。」（三・八・一）彼女は言った、「私は君に、ヤージュニャヴァルキャよ、カーシー〔国〕の、あるいはヴィデーハ〔国〕の軍事長官の息子が弛めてあった弓に弦をつけ、敵を射貫く二本の矢を手にして、立ち出でるように、まさしく

武官

そのように、私は君に、二つの問いをもって立ち出でたところです。その二つを私に語りなさい。」「問え、ガールギーよ。」（二）

〔以下、再び経緯の表現を用いて空間・時間の基礎を問う。答は虚空、さらに不滅のもの（アクシャラ）〕

彼女は言った、「婆羅門の方々、君たちは敬意を表することでこの人から許してもらえるだけで、大したことと思わねばなりません。君たちの中の誰一人、決してこの者から論争（ブラフモーディヤ）を勝ち取ることはないでしょう。」それからヴァーチャクナヴィーは〔問うのを〕やめた。（一二）

〔続いてヴィダグダ・シャーカリャ（シャカラの末裔「焼け尽くした男」）が神々の数から問いを発し、通俗的な八つのプルシャ説（肉体に属する人、欲望からなる人、太陽の中にいる人、聴覚に属してこだまに関わる人、影からなる人、鏡の中にいる人、水の中にいる人、息子からなる人）を展開するが、ヤージュニャヴァルキャはそれら全てに答えた後、攻撃に転じ[3]、自分からも問いを出して真の論争に展開する。その結末〕

「これらが八つの拠り所、八つの世界、八つの神々、八つのプルシャ（「人」）である。これら（君の説いた）八つのプルシャを運び出し、もとへ戻して、歩み越えた者、そのウパニシャッドに属するプルシャを君に問う。それを君が私にはっきりと語らないならば、君の頭頂は飛び散るだろう」と〔ヤージュニャヴァルキャが〕言った。それをシャーカリャは思い浮かべ（られ）なかった。彼の頭頂は飛び散った。しかも、彼の骨を盗人たちが、なにか別のものと思って、持ち去った[4]。〔以下略〕（三・九・二六）

（1）ジャナカは常にヴァイデーハといわれる。意味は「ヴィデーハの末裔、ヴィデーハの人」からアクセント移動によってつくられた特定・特別のヴィデーハ人を指す。ヤージュニャヴァルキャは

彼にサムラージ「大王、（諸王を）統括する王」と呼びかけている。

（2）アールタバーガが大宇宙と小宇宙の関係について示した学識をよしとして最新の思想を伝授するのである。ここに最新の説として言及されるカルマン（業）説の具体的中身は本章2に見られる。

（3）三・九・一八「シャーカリャ、君をここにいる婆羅門たちが火消し壺（火消し役）にしたというのかね」（シャーカリャの名「焼け尽くした男」を揶揄したものか）。彼がヤージュニャヴァルキャの本領に属するプルシャとアートマンの解釈の皮相なヴァージョンを述べたことが主人公を真に挑発したものと推察される。

（4）諸部位の骨は有用な利器として利用されたであろう。

2 死にゆくとき

『ブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッド』第四巻には、ヤージュニャヴァルキャがジャナカ王を尋ねて行なった二回分の対話（教示）が収められている。王は『シャタパタ・ブラーフマナ』（など）に述べられる話において、アグニホートラ祭に関する学識によって、ヤージュニャヴァルキャに自由に問うてよい権利を得ていた（「それ以来、ジャナカはブラフマンであった」一一・六・二・一〇。ここではブラフマン「祭官、ブラフマン祭官」が神学論争に加われる資格をもつ者ととらえられており、興味深い）。王は執拗な問いによってヤージュニャヴァルキャから、次第に、より本格的な教えを引き出していく。ことに、四・三・三四までは、それ以後の部分から見ると、一種の序章をなして

vídagdha-
→ Kl. 'Erfahrener, Kenner'
「通人」(A.B. 上村)

おり、訳例によって示すのは四・三・三五―三八（臨終時の解説）によって導入された最終部分をなす。哲学的内容（アートマン、プルシャ、ヴィジュニャーナ「認識機能」、輪廻、業）も重要であるが、ヤージュニャヴァルキャが、究極的には、婆羅門教の（世俗的）基本理念の一つである、長男の存在による死後の世界の保証を否定して、出家を称讃する点は見逃せない意義をもつ。彼は当箇所に続く第四巻の最終章で、妻に有名な教示を与えたのち出家するのである。真実の婆羅門、欲望（カーマ）と行為と人間のあり方との関係、そして彼の教説から読み取れるヴィジュニャーナの概念なども初期仏教文献に連なるものがある。伝承には二本あり、わずかな差異は理解の差をも反映するらしい。ここでは流布本（カーヌヴァ本）によったが、アクセントが解釈を左右する場合のみ、アクセント表記のあるマーディヤンディナ本（より本来的と考えられる）を参照した。

そこでこのアートマン[1]が無力状態に陥った後、あたかも意識混濁に陥ると、するとこれら（生体の）諸機能がそれ（アートマン）へ向かって集まって来ます。それ（アートマン）は、これら光熱の要素（諸機能の構成要素）を取り収めながら、ほかならぬ心臓へと降りて行きます。そこでこの視覚に属している（視覚を司る）プルシャ（「人」）があちら側へと向きを変えて戻ると、すると人は形を認識しない者となります。（四・四・一）

合一します。[2]（すると）人々は「彼は（ものを）見ない」と言います。合一します。人々は「彼は嗅がない」と言います。合一します。人々は「彼は味わわない」と言います。合一します。人々は「彼は語らない」と言います。合一します。人々は「彼は聞かない」と言います。合一します。人々は「彼は考えない」と言います。合一します。人々は「彼は触れない（触覚がない）」と言います。合一

死に行く時の失われる知覚の順序？
↕
器官の位置？

→ cf. tejas.
AitUp II 1 yad etad retas, tad etat sarvebhyo 'ngebhyas tejaḥ sambhūtam,
「このretasなるもの，それはこの全ての身体部位から集められたtejasである」
→ AB VII 13,11 (gāthā 9)
devāś caitām ṛṣayaś ca tejaḥ samakharan mahat
「神々と聖仙たちとがこの［善なるもの］と偉大なるtejasを蓄えてつくった」

男性人間に生まれる → karman に有利（脱の文脈でない）

manas- 特記すべき

M版「合意に場所へ」saṃjñānam evānuvāvatiṣṭhate の一文アリ注イ！

します。人々は「彼は識別しない」と言います。

そういう状態にあるこの人の心臓の先端が閃きます。その閃きとともにアートマンは出て行きます。眼（「視覚」）から、または頭頂から、または他の身体諸部位から。それが出て行くと、気息（プラーナ「呼気、呼吸、生気」）がついて出て行きます。気息がついて出て行く時、全ての諸機能がそれについて出て行きます。（アートマンはその結果）認識（判断）機能を備えたものとなります。（認識機能を備えたアートマンは再び）認識機能を備えたもの[3]へと降りて行きます。それ（認識機能を備えたアートマン）に知識と行為（「業」）とが後ろから一緒につかまっています、（その後ろに）以前の叡智（前生に得た理解・洞察）も。（二）

それはあたかも、尺取り虫が草の端に到達した後、別の一歩を踏み出してから自分自身を引き寄せる、ちょうどそのように、このアートマンはこの身体を打ち倒し、無知に赴かせた後、別の一歩を踏み出してから、自分自身を引き寄せます。（三）

それはあたかも、綾織りの織女が綾織りの要素をほどいた後、別の、より新しい、より素晴らしい形を織るように、ちょうどそのように、このアートマンはこの身体を打ち倒し、無知に赴かせた後、別の、より新しい、より素晴らしい形をとります、（すなわち、）祖霊に属する、またはガンダルヴァに属する、または神々に属する、またはプラジャーパティに属する、またはブラフマンに属する、または他の諸存在の〔形〕を。[4]（四）

このアートマンはブラフマンなのです。認識機能からなり、思考機能からなり、呼吸からなり、視覚からなり、聴覚からなり、大地からなり、水からなり、風からなり、虚空からなり、光熱からな

pajjotassera nibbānaṃ「ともしびが消えるように」DN II 157, 15v (Mahāparin)

を通って

後の kaivalya 論へ

≈ indoiran. āsu-

ā — p → p. 76 Note ≈ JB I 18

視 聞 味 言 聴 考 能

→ cf. 特殊

manas- も並ぶ → 仏教的！

M版 → goro 四苦

saṃjñāna-「（諸 vijñāna-が）同意したところ」

→ cf. RV X 19, 4（手たちの集合体 :: pariyāna-）

ātman (— prāṇa-) — vijñāna たち

連結は kāma- に因，連結によって輪廻

ātman- の独立 = brahman-

vijñāna- がある vijñāna- のなかへ（同質性）

足を用脱に入れる（駆動）

支える）推進力 — vidyā- — karman

pūrva- prajñā-

道？

cf. yathākarma yathāvidyam Kaus Up cf. WINDISCH 8'sg 72, 76

どこへ行くかを決定 cf. prajānāti (den weg)

これは天界で合体 (cf. iṣṭāpūrta-)

出産時（前）に母胎から離れて天界に戻る(?)

道を解る → 般若波羅蜜多

り、光熱ならざるものからなり、欲望からなり、欲望ならざるものからなり、怒りからなり、怒りならざるものからなり、正義からなり、正義ならざるものからなり、全てからなっています。それはこの、〔人が〕「これからなる、あれからなる」と〔いう〕ところのもの（全て）です。（アートマンは）どういう行為をなし、どういう行動をなすかに従って、（来世で）それに応じた状態になります。正しい行為をすると、正しくなります。悪い行為をすると、悪くなります。善い行為によって善く、悪い〔行為〕によって悪く（なります）。

だが他方[5]、「この（地上の）人間（プルシャ）は欲望よりなる」と人々は言います[6]。彼はどんな欲望をもっているかに従って、それを念ずる者となります。あることを念ずる者となると、その行為をなします。ある行為をなすと、それ（その行為に応じたもの）へと到着（再生）します。（五）

それについて次の頌がございます。

執着する人は行為（業）とともに赴く、
指標となる彼の思考が執着している当のもとへと。
この人がこの世で何をなすとも、
その行為（業）の端（尽きるところ）に到達した後、
その世界から再び戻る、
この世界へ向かって、行為〔をなす〕ために（業を積むために）。

と。さて、以上は欲望をもっている人が（の場合）です。

次に、欲望をもっていない人、（つまり）欲望なく、欲望を脱し、欲望を達成し、（もはや）アート

マン（のみを）欲望する人の場合は、その人の諸機能は（外へ）出て行きません。ブラフマンそのものとしてありながら、（そのまま）ブラフマンに入って行きます。（六）

それについて次の頌がございます。

彼の心臓に依拠している
全ての欲望が解き放たれるやいなや、
すると、死すべき〔人〕は不死となる。
そのとき彼は完全にブラフマンに到達する。

と。それはあたかも、蛇の抜け殻が蟻塚の上に死んで打ち捨てられ、横たわっていることがある、ちょうどそのように、この身体は横たわっています。だが、身体をもたない不死の気息はブラフマンに他ならず、光熱に他なりません。（七）〔以上ヤージュニャヴァルキャのことば〕

「この私は貴兄に千（頭の牛）をあげます」とヴィデーハの首領ジャナカは言った。〔ヤージュニャヴァルキャはブラフマンとアートマンに関する一四の頌を挙げる。略〕

この、生命諸機能のうちで認識機能よりなるものは、まさしくこの偉大な、不生のアートマンです。（それは）心臓の内部にある虚空、その中に横たわっています。全てのものの権力者であり、全てを支配し、全てのものの君主です。それは正しい行為によって増えることなく、正しくない〔行為〕によって少なくなることもありません。これは全ての主宰者です。これは諸存在の君主です。これは諸存在の守護者です。これはこれらの諸世界が破れ混ざらないように分かち保つ堤です。そのようなこれを、婆羅門たちは学ぶことによって知ろうとします、祭式によって、布施によって、苦行に

よって、断食によって。まさしくこれを知れば、人はムニ（沈黙の聖者）となります。まさしくこの（ような）世界を希求しつつ、出家者は出家するのです。まさしくこのことを知っていた往古の人たちは自分の子孫を欲しがらなかったものなのです。「子孫によって何をしようというのか、我々にはこのアートマンが、この（ような）世界があるというのに」と（考えて）。彼らは、息子を希求することと、財産を希求することと、（死後の）世界を希求することとから離れて立ち上がり、そして、乞食の暮らしを暮らしたものです。息子を希求すること、それは財産を希求することであり、財産を希求すること、それは世界を希求することですから。というのも、これら両項ともに希求することに他ならない（欲望ということでは変わらない）のですから。

そういうこの「ではない。ではない」と（のみ述語される）アートマンは不可捉です。捕捉されませんから。不壊です。壊れませんから。無執着です。執着しませんから。結び付けられていない（のに）、動揺しません。破損しません。一方では、「私はここに悪いことをしてしまった」ということも、「私はここに素晴らしいことをしたぞ」ということも、両方とも、これ（アートマン）を渡り越えることはないと（言われています）。他方、この両者をこれは渡り越えるのです。為したことと為さなかったこととがそれを苦しめることはありません。（二二）

それについて、次のように讃歌によって述べられています。

これが婆羅門の本性たる（永遠の）偉大さである。
（それは）行為によって増大することなく、少なくなることもない。
人は、他ならぬそれの、足跡を知る者であるべし。それを知った後には、

amṛta- = punarmṛtyu- の反語

Buddhaにとっては nirvāṇa-
//
ブラフマンの世界

それはこの

（人は）悪い行為（業）によって汚されることはない。

と。それ故、このように知る者は、安らかで、（心を）制し、憩い、忍耐強く、精神集中した者となり、自分（アートマン）の中にアートマン（自分）を見ます。全てをアートマンと見ます。この者を悪が渡り越えることはありません。（彼が）全ての悪を渡り越えます。この者を悪が苦しめることはありません。（彼が）全ての悪を苦しめ（熱し除き）ます。悪を離れ、汚れを離れ、疑念を離れ、婆羅門（本当の婆羅門）となります。これがブラフマンの世界（最上界）です。大王よ、君はそれに到達させられています。とヤージュニャヴァルキャは言った。

「この私は貴兄にヴィデーハの人々（国）を与えます、それに私をも添えて、下僕として仕えるために」と（ジャナカは言った）。（二三）

そのようなこの、偉大な不生のアートマンは、食物を食べる者、財産を布施する者である。このように知る者は財産を得る。（二四）

なの

そのようなこの、偉大な不生のアートマンは、老いず、死なず、不死であり、恐れず、ブラフマンである。ブラフマンは安泰[7]なのだ。このように知る者は、実に安泰であるブラフマンとなる。（二五）

（1）他本では「身体に関わるアートマン（身体としての自我）」。四・三・三五に、死の直前、身体に関わるアートマンが叡智に関わるアートマンに乗りかかられて喘ぐことが述べられる。「心臓へ降りて行く」ことから考えると、身体各部位（アンガ）、とりわけ頭部に出向いて視覚、聴覚などの諸機能を主宰している主体、プルシャ（「人」、人間の中にある人）が念頭にあるように読める。個人の主体は、生体を検討する時にはプルシャとして、輪廻の主体としてはアートマンとして議論

~M IV 4,30「無畏に，汝よ，君は到達している」（≡BĀUK IV 2,4 M IV 2,6）
áthayan vái janaka prāpto 'séti

全体のテーマ
∵ 四苦の「物」